

世界がまだ作られたばかりのころ。人間は、そまつな小屋に住んで、そこらを歩き回って手に入れたわずかな食べ物で暮らしていました。

ある日のこと、川のほとりの村に、ぼろぼろの着物を着たおばあさんがやって来ました。村の男たちはみな狩りに出て、女たちは木の根や野草を集めに出かけていました。村には、わずかな子どもたちだけが残って、火種をたやさないように守っていました。子どもたちはおばあさんを見ると、口ぐちにいました。

「ここには、おまえなんかにやる物は何もないよ。となりの村へ行つてしまえ」

おばあさんは、だまつて立ち去り、となりの村に行きました。けれども、どこの村でも、みんなは、おばあさんを相手にしないで追いはらいました。

やがて、おばあさんは、小さな貧しい村にやって来ました。おばあさんが、

「どうか、食べ物少しもらえませんか。そして、火に当たらせてもらえませんか」とたのむと、村の女たちはいいました。

「どうぞ、火の側におすわりなさい。すぐに食べ物をさがして来ます」

そして、晩ご飯のあと、おばあさんを、火の側の一番よい場所に寝かせてくれました。

つぎの朝、男たちは森へ狩りに出かけ、女たちは、木の根や野草を集めに出かけました。おばあさんには、子どもの世話をたのみ、火種をたやさないようにたのんでおきました。

夕方、村の人たちが帰つて来ると、子どもたちが、口ぐちにいいました。

「ぼくたちはもう晩ご飯を食べたよ。おばあさんが作ってくれたんだ。木の根や草の実より、ずっとおいしかったよ」

村長（むらおさ）は、子どもたちに、

「もしあしたもおばあさんが晩ご飯を作ってくれたら、それを少し残しておいてくれるように、おばあさんにたのみなさい」といいました。

つぎの日の夕方、村の人たちは、おばあさんの作ってくれた晩ご飯を食べました。それは、今まで食べたどんな物よりおいしい食べ物でした。おばあさんがそれをどこで手に入れるのか、村の人たちはさぐり出そうとしましたが、どうしても分かりませんでした。

ある日、おばあさんは、来たときと同じように、とつぜん村を去って行きました。いくらさがしてもおばあさんの行方は分かりませんでした。

ひとりの若者が、おばあさんの作ってくれた晩ご飯の味がわすれられず、おばあさんを見つけ出す決心をしました。

若者は、川をわたり、山をよじ登り、森や沼地をぬけて、どこまでも歩いて行きました。

ある夕方、若者はつかれきつて、たき火の側に横でなっているうちに、とろとろと眠ってしまいました。ふと目を覚ますと、目の前に、あのおばあさんが、まつしろな長い

髪の毛を背中にたらし立て立っていました。若者は大よろこびして、

「おばあさん、どうかわたしたちの村に帰って来てください」とたのみました。おばあさんは、

「わたしはあんたたちの所に帰るわけにはいかなんだよ。でも、わたしのいうとおりにしたら、わたしは、いつもあんたたちの側にいるよ」といいました。

おばあさんは、若者を、川岸の草原（くさはら）に連れて行きました。そこには背の高いかれた草が一面に広がっていました。おばあさんは、

「火を着けてその草を焼きなさい」といいました。若者が火を着けると、またたく間に火は燃え広がって天までとどくほどになりました。やがて火が消えて、広い土地に灰だけが残ると、おばあさんは、いいました。

「わたしの髪の毛をつかんで、焼けあとの土の上を、たてよこ十字に引きずり回しなさい。わたしを引きずったあとの地面に、新しい草が生えるだろう。その草の葉と葉の間からわたしの髪の毛のぞいたら、実がじゅくした印だよ」

若者は、いわれたとおり、おばあさんの髪の毛をつかんで、土の上をたてよこ十字に引きずり回しました。それが終わると、おばあさんのすがたは消えました。若者は、たき火の所にもどりましたが、これは夢ではないかと思いました。

朝になって、若者が川岸に行ってみると、一面に、見たことのない草が、頭までとどくほど高くしげっていました。その草の葉と葉のあいだに、おばあさんの髪の毛のぞいていました。葉をむいてみると、おいしそうな実がぎつしり付いていました。

これがどうもろこしの始まりです。今でも、どうもろこしは、毛を生やした実を付けます。その毛を見ると、人びとは、どうもろこしおばさんが、自分たちをわすれないでいることを思い出すのです。

原話：『新編世界のむかし話100アメリカ・オセアニア』山室静編著／文元社
再話：村上郁